方便寿量相依問題を論じて定期間段階集成説に及ぶ

伊藤瑞叡

一、従来の法華経成立論の学的特徴は如何？

この点に関する私見の広説（audārika-nirdeśa）は、拙著『法華経成立論史—法華経成立論の基礎的研究—』（平成十九年、平楽寺書店）に批判として教説するところを略説（samāsa-n.）し、更に図式化して要説（saṃkṣepa-n.）すると、左の如くになる。

D＝Dialektik

D №9・1	These
拙著『法華経成立論史—法華経成立の基礎的研究—』における従来の成立研究に対する批判を要約して示すと	▽先行（の）要素（に）還元（して）分析（する）手法
	↓文面構成形状分析 → 全体分化成立時差推定 → 全容結構形態解体検証
	▼構成諸要素の内的必然関係を看過し主題たる経体（システム）の理念的意趣を無視する
	▼論証方式は形式論理学上の虚偽論における研究法・統整法の誤謬に相当して成立しない如くである
	（分化を批判して統一を媒介として統合し以て総合する観点・方法を示すと）
	○必然（の）構造（と）機能（を）分析（する）手法
	↓義理構成の構造分析による論理（的）構造の明証 → 意趣構成の機能分析による理念（的）意趣の追究
	○Was ist eigentlich Saddharma-puṇḍarīka-sūtra? what→so what →why に対応しうる原典解明学を要する

Synthese ← Antithese

右の図式の中、従来の諸研究は These（定立）に位置し、拙著『法華経成立論史（＝法華経成立の基礎的研究）』での批判的研究は Antithese（反定立）に位置する。そして拙著『法華菩薩道の基礎的研究』（平成十六年、平楽寺書店）と、余のその後の拙論と続行中の研究は Synthese（止揚総合）に位置する、と比定する。

二、かくして新研究の可能なる観点・方法・課題・目的を提言する

すなわち、法華経の従来の研究を前提として、それの新研究の観点ないし目的となしうるところと、その帰結を要約し、もって図式化して示すと、左の如くになる。

Synthese（仏教古典学）	Antithese（批判仏教学）	These（既成仏教学）	D No.9・2
〈第三次段階・仏教古典学〉 二品一対相依関係・法華経と妙法（と）の関係 ↓○〔第十二図〕法華経原典構造機能分析総合解明図・二十八品定期間集成（＝集成・制作・編成）説 一定期間段階集成の構造機能根本原理	↓○〔第十一図〕原典総合分析（＝分化統合＝分析・解体＋総合・創造）図　A・B・C 〈第二次段階・批判仏教学〉 ○各学説（を）比較（して幾つかの類型に区分し）批判（＝反立する相異を明確にし各々の正当な権利を認めて総合）（する）― 従来の諸説中、28種の成立論を批評研究の対象として分析（解体）＝総合（創造）判断し評価規準を明示して批判評定する―	従来の諸説――〈第一次段階・既成仏教学〉 (1)ビュルヌフ説（長行先行偈頌次集説）(2)ケルン説（偈頌原形長行後加説、二十一品古形六品後分説）(3)常盤大定説（前二十一品中十品第一段落・方便乃至人記八品第一次説）(4)松本文三郎説（長偈具備本体説、二十一品原形・六品後世添加説）(5)木村泰賢説（一経三段構成説）(6)宇井伯寿説（原形二十一品説）(7)和辻哲郎説（作品構造論・短期成立可能説）(8)本田義英説（二十一品原始分・六品後分説）(9)布施浩岳説（三類構成四期成立説）(10)山川智応説（二処三会構想完成形態説・説相対応寿量品中心説）(11)塩田義遜説（三段三期成立説・宝塔品証前起後説）(12)土田勝弥説（偈文に関する言語学的考察）(13)吉田龍英説（原形懐疑説・群品集成原形説）(14)渡辺楳雄説（勝天王般若経・首楞厳三昧経先行説）(15)中村　元説（法華経成立上下限推定説・社会基盤推定根拠説）(16)鈴木宗忠説（古層新層原始分・六品同類附加分説）(17)横超慧日説（原始八品増補余品説）(18)紀野一義説（根本抽出仮定説・中核部分原始法華経説・三類構成説）(19)岩本　裕説（四期成立説）(20)田村芳朗説（三類三期成立説）(21)静谷正雄説（同時成立動向説）(22)藤田宏達説（八品第一段階中核説）(23)苅谷定彦説（二十品有機的結合説・原初的法華経二十品説・嘱累什訳経中移行論）(24)渡辺照宏説（法華元来法師語（ちのもの）説）(25)平川　彰説（一定期間成立過程説）(26)勝呂信静説（二十七品同時成立説）(27)塚本啓祥説（法華経担い手実体推定説）(28)井本勝幸説（成立時代地域作者直接推定説） 拙著『法華経成立論史』の示す観点・方法による帰結	

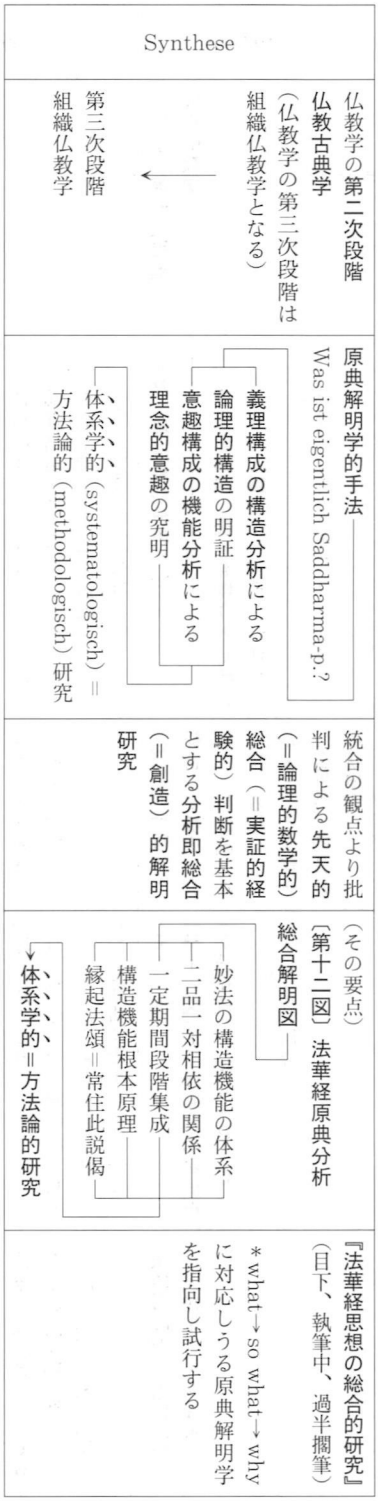
なお、この図解（拙論「法華経研究の新方法序説」）の中、従来の諸研究 These の区分域にあって、しかも These の傾向を代表する研究成果、それは布施浩岳説（三類構成四期成立説）・横超慧日説（原始八品増補余品説）であり、Antithese の傾向を代表する研究成果、それは和辻哲郎説（作品構造論・短期成立可能説）・山川智応説（二処三会構想完成形態説）であり、Synthese の傾向を代表する研究成果、それは平川彰説（一定期間成立過程説）・勝呂信静説（二十七品同時成立説）である、と筆者は見る。

三、新研究の観点ないし方法に関する分析の概要

この点について、従来の諸研究と対比して、拙著拙論の提示するところを図式化すると、左の如くになる。

拙著・拙論の示す研究の観点・方法・課題・目的に関する分析の概要は、左の如し

D / No.10	観点（Gesichts-punkt）	方法（Methode）	課題・目的（prayojana）speculation	拙著
These	仏教学の第一次段階の前提条件（＝対象）となる既成仏教学（としての法華経成立論）	（先行）要素還元分析手法 文面構成の形状分析に停滞 全体分化による成立時差の推定 結構解体による構成関係の看過 論理構造・理念意趣の無視 形式論理学上の論証誤謬 Idola specus 等の傾向あり	（先天的理性的）分析（＝解釈）判断（＝機械論的分析による分化）を基本とする解体的分析解明研究	――――
			（その全部）諸学説比較批判（従来の諸学説を系年順に批判の対象とし分析し分類し総合し私見を随所に提示もし要説する）	『法華経成立論史―法華経成立の基礎的研究―』（平成19年、平楽寺書店）
Antithese	仏教学の第一次段階批判仏教学	（必然）構造機能分析手法 分化を批判し統一を媒介とし統合をもって総合（＝創造）へ向う 体系的（systematisch）研究	（後天的経験的）総合（＝拡充）判断（＝目的論的統合による総合）を基本とする統合（＝批判）的分析解明研究	（その一部）（第十一図）法華経原典総合分析（＝分化統合）図A・B・C 体系的研究	『法華菩薩道の基礎的研究』（平成16年、平楽寺書店）



四、しからば These としての既成仏教学の諸成立論に対する、Antithese としての批判分析的にして統合解明的なる研究とは如何

これは拡充判断を基本として構造機能分析手法をもってする。

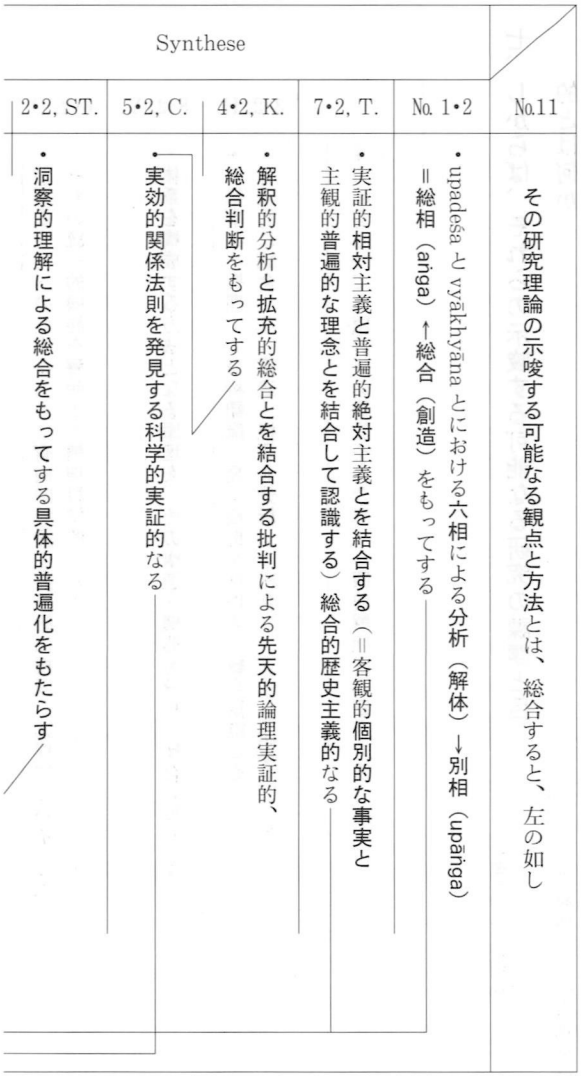
その Antithese なる新研究の志向性の一部にして要結するところを図式化して示すと、拙論「法華経研究の新方法序説」の中、〔第十一図〕原典総合分析（＝分化統合）図A・B・Cの如くになる。分析・総合の観点・方法の略説は別論にゆずる。

五、Synthesesとしての論理実証的にして分析即総合的なる研究とは如何

これは先験的（アプリオリ）（＝体系的）判断を基本として構造機能分析をもってする原典解明学的研究である。

その目的は前記の原典分析図における未解明の三角形の頭頂に位置する総相（aṅga）にして上位概念（Superordinate concept）なるXの何たるか、その別相（upâṅga）にして下位概念（Subordinate concept）の基本の何たるか、両者の必然的関係の何たるか（これをもXと記号する）を解明することにある。

六、原典解明学的研究には東西の研究理論の示唆する可能なる観点と方法を総合的に適用する必要も



No. 1・2 ：*Daśabhūmika-sūtra, Daśabhūmika-vyākhyāna, Saddharmapuṇḍarīka-sūtra-upadeśa.*
T.：Ernst Troeltsch.
K.：Immanuel Kant.
C.：August Comte.
ST.：Systematic Theology.
D.：Wilhelm Dilthey.
Y.：YAMAZAKI Shoichi
H.：Thomas Hobbes.

6•2, D.	8•2, Y.	3•2, H.
普遍妥当性への要求をもって有機的特質を実証的に把握し論理的に分析して、それの統一的機能を解明する精神科学的なる	・体系を構成する方法となる原理を、その構造・機能を分析＝総合し解明する	結果事象を推理する分析認識と発生根拠を推理する総合認識とを合理的に統合する「構造・機能＝分析（＝総合）」をなす解明学的なる
		方法をもって言語分析の手法をも含意する原典解明学的研究方法である

七、しからば、それらの示唆する可能なる研究の課題と目的とは何か

それらを批判し総合して、法華経の原典解明に適用し簡明に図式化して示すと、左の如し。

No.12	No. 3•1, 3•2, Hobbes
その研究理論の示唆する可能なる研究の課題と目的とは	(1)事物（→法華経）、(2)原因（→法華経集成の根本原理）、(3)根本概念（→Saddharma, etc.）、(4)それの体系構造（→二つの随宜所説意趣 Saṃdhā-bhāṣya と教・行・証の三義）、(5)実践哲学（→菩薩行 bodhisattva-caryā・法師 dharma-bhāṇaka の体系）、(6)理念（→如来寿量 Tathāgat'āyuṣ-pramāṇa）、(7)意趣（→一仏乗 eka buddha-yāna）とは何か

No. 3•1, 3•2, Hobbes	No. 5•1, 5•2, Comte	No.7•1, 7•2, Troeltsch
を解体的分析と創造的総合とを合理的推理をもって統合して(A)命題（→仏・法・菩薩は……である）の連関体系として論理実証的に解明すること——である。	㋑神的存在者（→仏・菩薩）、㋺内的存在者（→仏知見 tathāgata-jñāna-darśana・如来性 tathāgatatva）、㋩実効的関係法則（→構造・理念・原理→生滅の道理 etc.）を、それぞれ論理実証的に解明すること——である。	①如何なる歴史的個別的存在（→法華経）に—— ②如何なる普遍的妥当的存在（→Saddharma）が—— ③如何なる体系的構造（→妙法の二意、教行証の三義）をもって—— ④如何なる機能（→畢竟住一乗＝令衆生仏知見道）を—— ⑤如何（→唯一の合目的々作用 eka-prayojana＝令入於仏道のもと）に———

№7・1, 7・2, Troeltsch	⑥如何なるもの（↓縁起法頌によって示される生滅の道理なる縁起 pratītya-samutpāda）を根本原理として—— ⑦如何よう（↓二品相依の立体楕円の円環運動の如く）に—— 構成されているかを論理実証的に解明すること——である。

八、それを批判し総合し要約すると

	№13	前図を批判して総合し要約すると、左の如し
	1	①歴史的個別的存在としての(1)事物なる法華経（Saddh-p.）に、
	2	②普遍的妥当的なる存在を示す(3)根本概念なる Saddharma が、
	3	㋩それの如何なる実効的関係法則としての③(4)体系構造（＝構造・機能をもつ体系）（↓Saddharma の二つの随宜所説意趣 saṃ=dhā-bhāṣya・教・行・証の三義 etc.）をもって、
	4	④如何なる機能（↓令「衆生入」仏知見道」＝畢竟住」一乗」）を、
	5	⑤如何なる目的（↓令「入」於仏道」という eka-prayojana）のもとに、
Troeltsch	6	㋺如何なる内在的存在者（↓仏知見＝如来性 tathāgatatva）をもつ、
	7	⑥如何なる理念（イデア）（↓如来寿量＝常住不滅 sadā sthita apranivṛta）への(7)如何なる意趣（イデアール）（↓一仏乗 eka-buddha-yāna）を含意する、
Comte,	8	(5)如何なる実践哲学（↓菩薩行 bodhisattva-caryā＝法師の体系）として、
	9	(2)如何なるもの（↓生滅の道理なる縁起という甚深法）を、法華経集成の原因となる(6)根本原理として、

Hobbes,	10 ⑦如何なる相存在（↓二品一対相依の重層円還運動）として構成されて、
	11 (A)㋑如何なる神的存在者のありうる命題（↓仏・法・僧）の連関体系としてあるのかを論理実証的に解明する

九、その課題・目的を原典解明学的に研究せしもの

それは、拙著『法華菩薩道の基礎的研究』（平成十六年、平楽寺書店）である。筆者は、それによって妙法の理念的意趣を論理実証的に究明する仏教の原典解明学としての古典研究をなしたのである。

- 序
- 第一篇　法華経の経題の研究——
  - 第一章　華厳十地経より見たる法華経の経題
  - 第二章　Saddharmapuṇḍarīka の原意語義
- 第二篇　法華経の Saddharma の研究——
  - 第一章　比較経典学より見たる Saddharma の三義
  - 第二章　方便品における Saddharma の意義 —Saṃdhā-bhāṣya＝eka buddha-yāna—
  - 第三章　如来寿量品における Saddharma の意義 —Saṃdhā-bhāṣya＝tathāgat'āyuṣ-pramāṇa ＝sadā sthita aparinirvṛta—

第四章　Saṃdhā-bhāṣya の語義概念と関係構造
第五章　如来神力品における Saṃdhā-bhāṣya の語義解釈（＝釈名 nirukti）
第六章　如来神力品における Saddharma の意義、四句要法
第七章　嘱累品における Saddharma としての anuttarā samyak-saṃbodhi の意義

第三篇　法華経の菩薩行の研究

第一章　久成の釈尊との関係より見たる菩薩行
第二章　上慢の四衆との関係より見たる菩薩行
第三章　法師の体系との関係より見たる菩薩行
第四章　菩薩行（bodhisattva-caryā）なる成語によって明示されるその属性と体系

第四篇　法華経の諸問題の研究

第一章　比較経典学より見たる一乗三乗説
第二章　仏性の語義概念と関係諸語
第三章　仏性の実用（＝合目的々作用）
第四章　方便品における仏種従縁起の原意語義と漢訳概念
第五章　如来寿量品における如来秘密神通之力の語義概念と漢訳概念

第五篇　結論にかえて

第一章　法華経神力嘱累付嘱考
—法華経における仏と法と菩薩との
それぞれの位相（＝連関体系）—
第二章　法華経 adhiṣṭhāna 再考
—その体系、すなわちその主体と対象と関係・作用について—
跋

十、そして、研究の課題・目的の帰結するところは如何

以上の研究理論の要結をもって従来の諸研究と筆者の研究の積分的経験とを照合せしめると、左の如し。

№14

その研究理論の示唆する可能なる研究の課題と目的とは

(i)（菩薩 bodhisattva〈-caryā〉思想という）史的特殊の(ii)（法師 dharma-bhānaka の体系という）思想的空間と—
(iii)（妙法 Saddharma という）絶対普遍の(iv)（随宜所説意趣 Saṃdhā-bhāṣya という）思想知見と—
を条件として
(v)（生滅の道理なる縁起 pratītya-samutpāda という）絶対的原理のもとに
(vi)（妙経の二品一対相依と妙法の二意趣・教行証の三義という）構造をもって

№8•1, 8•2, Yamazaki

(vii)（畢竟住二一乗一・令レ入二於仏道一なる唯一の合目的々作用 eka-prayojana を）機能とするところ／を論理実証的に分析し総合して(B)再構成すること――である。

十一、しからば、仏教古典学における原典解明学的方法としての構造・機能＝分析（＝総合）とは

構造・機能＝分析（＝総合）とは、戦後の社会科学の一大業績といわれるパーソンズの社会システム論でいう構造・機能＝分析（Structual-Functional Analysis＝SFA.）を適用してのことでもある。筆者は已にこれを、仏教学の原典解明（の）学における、思想内容の論理的構造、それの機能である理念的意趣を把握することを目的として分析＝総合する方法として、多少の改変を加えて、しばしば適用試行したのである。

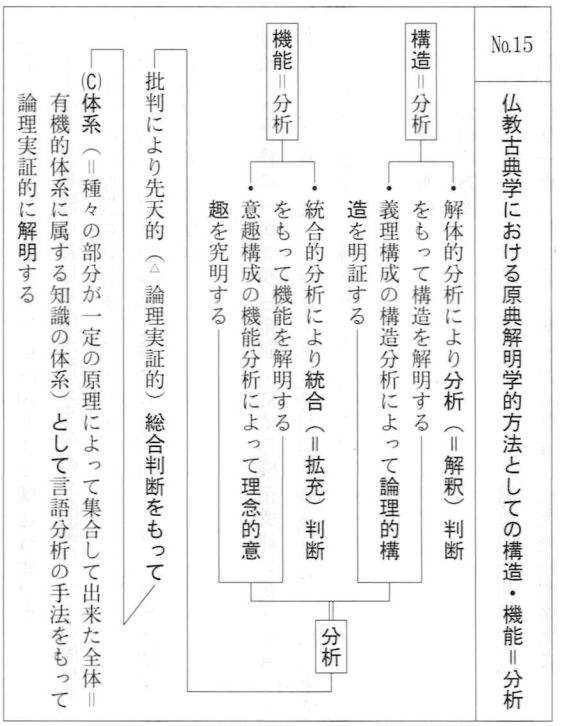
すなわち筆者の使用する私流のSFA.とは、カントの批判哲学を適用して、解体的分析により分析（＝解釈）判断をもって構造を解明し、統合的分析により総合（＝拡充）判断をもって機能を解明して、両者に対する批判により先天的（△論理実証的）総合判断をもって(C)体系を解明する、という手法としてである。

よって、これは原典解明学における、義理構成の構造分析によって論理的構造を明証し、意趣構成の機能分析によって理念的意趣を究明する、という手法に相応する。

また、これは構文論的（syntaktisch）と語用論的（pragmatisch）と意味論的（semantisch）との諸関係に分析して三次元の関係に類似する言葉の現象の全体として総合する、という言語分析の手法にも相応するでもあろう。

要するに、法華経の研究には、ボヘンスキー博士の云う真摯にして訓練された哲学的思考をもってする冷静な研究が要請されていることになろう。

簡約して図式化すると、左の如し。



十二、原典解明学としての構造機能分析の事例

それは左の如くである。

拙論「法華経における妙法（Saddharma）の概念作用（conception）の構造機能分析　―その図式的解明―」（平成21年、『法華文化研究』第35号所収）―

〔第一図〕Saddharma の三義の概念（concept）
〔第二図〕Saddharma とその属性を示す諸用例との必然的関係
〔第三図〕Saddharma 三義の内的関係
〔第四図〕Saddharma の同義異語
〔第五図〕(1)Saddharma の語義概念を構成する属性用語の内的関係、(2)、(3)、(4)、(5)
〔第六図〕Saddharma と同義異語の Saṃdhā-bhāṣya ないし他の類義語、反意語との構文論的・意味論的・語用論的な諸関係
イ)Saddharma＝Saṃdhā-bhāṣya の基本解釈構造
〔第六図(1)〕ロ)、(2)ハ)、(3)・(4)ニ)方便品長行の、
〔第六図(5)・(6)〕ホ)方便品重頌の、(7)ヘ)譬喩品長行領解段の、(8)ト)譬喩品重頌の、(9)チ)薬草喩品の、(10)リ)五百弟子受記品の、(11)ヌ)法師品長行の、(12)ル)勧持品偈頌16偈の、(13)ヲ)安楽行品長行の
〔第七図(1)〕ワ)如来寿量品・分別功徳品の
〔第八図〕常不軽菩薩品における略法華経における Saddharma の構造機能分析
〔第九図〕如来神力品における四句要法の構造機能分析
〔第十図〕法華経における仏法僧三宝の必然的関係（＝連関体系）
〔第十一図〕原典総合分析図A・B・C
〔第十二図〕法華経原典構造機能分析解明（二品一対相依関係・法華経と妙法の関係）

拙論「法華経の一乗思想三乗説に対する構造機能分析―華厳十地におけると法華一乗におけるとの比較対照（関係図式）―」（平成17年、仏教思想学会『佛教學』第47号所収）―

一、問題の所在
二、分析の方法
三、華厳十地における一乗思想三乗説の構造機能関係図式
四、法華一乗における一乗思想三乗説の構造機能関係図式
五、華厳十地におけると法華一乗におけるとの「一乗と三乗との関係」の比較対照

かくして、この新来の仏教古典学の原典解明学的方法による構造機能分析の研究結果は、なお、旧到の組織仏教学（Systematic Buddhology）である天台教学・日蓮教学の成果に対して比較研究を要するであろう。その結果として、第三次段階である総合的改新の組織仏教学の学的地平が開発されうるであろう。

十三、已に示した原典解明学の観点と方法とは、法華経成立論を解明しうるか

この学的な立場から、筆者は拙著『法華成立論史』の Antithese 所論を前提として、法華経の成立について Synthese として究明した拙論は、左の如くである。

これにより成立を解明するための諸問題を追求したのである。

拙論「法華経成立研究要論—**定期間段階集成説**—」（平成20年、『仏教文化の諸相　坂輪宣敬博士古稀記念論文集』所収、『法華学報』第十六号所収）—

- 一、問題の所在と観点・方法
- 二、**基礎的研究の課題と仮説**
- 三、成立の実状を示唆する法華経の文面による仮説
- 四、成立構成における主要問題の帰結—
  - 大乗仏教成立問題
  - 舎利塔経巻廟問題
  - **前後二類成立問題**
  - **方便寿量相依問題**
    - 提婆品編入問題
    - 嘱累品経中経末問題
    - 六品後世付加問題
  - **五、法華経構造関係図解**
    - **二品一対相依関係**
    - **法華経における妙法の構造**
    - **法華経成立年代諸説**
    - **法華経と妙法の関係**

十四、法華経成立上の最重要問題である方便寿量相依問題

以上の拙論において法華経の成立を追求する条件として解明した重要諸問題の中でも、方便寿量相依問題が妙法の二意三義ないし本迹二門にも必然的に連係するによりて、最重要である。

よって略説すると、左の如し。なお文中の記号・番号等は拙著『法華経成立論史』中のそれである。

塚本啓祥博士説④に摘出された(1)法師品と(2)分別品の文面および⑨(2)法師品以後には、それ（**ストゥーパの崇拝**）**を否定**して云々という解釈については、いわゆる§9布施説⑤(4)・⑧(5)と§26勝呂説⑫との対立する所見があり、また布施説の批評で示した如く山川・塩田の両博士の反論あり、拙論もあり、さらに塩田説に対する批評での拙論もある。参考とされたい。

しかしながら、したがって⑤の所説は、その中、布施説による第一期（序・方便・譬喩・信解・薬草・授記・化城・五百・授学・随喜の十品の偈頌）・第二期（その長行の敷衍）の区別と「第二期に

現れる遺骨塔供養の禁止」を、勝呂説⑫によって、除くなら、実証による明証的な所見であろう。

さて、ところで筆者は、⑥⑦に、**後世の銘刻における縁起法頌の流行**が指摘された点に着目したい。ことに**仏陀の生涯**の場面を表現するサールナートの石板の裏に**縁起法頌**が銘刻されている点を注意したいのである。

その原文には ye dharmā hetuprabhavā hetū teṣāṃ hy avada[t] teṣāṃ+ yo niroddho+ evaṃvādi mahāśramaṇaḥ とある。[33] **縁起法頌**は原始仏典（*Vinaya*, I, pp. 40; 41）ではアッサジ比丘の唱えた詩句で、これにより舎利弗は眼を開いたという。[34] 縁起法頌は**縁起**（＝縁生）偈ともいう。[35] 仏教の根本義である苦集滅の三諦（すなわち苦の生・滅の道理）＝法身の舎利を説くから**法身**（舎利）偈ともいう。[36] 縁起は**甚深法**（gambhīra-dharma）であり四聖諦は**最勝説法**（sāmukhaṃsikā dhamma-desanā）であることが想起されよう。

しかも涅槃経に**仏法の大綱**として説かれる**雪山偈**（＝諸行無常偈）に Aniccā vata saṅkhārā uppāda-vaya-dhammino, Uppajjitvā nirujjhanti, tesaṁ vūpasamo sukho'ti. (*Dīgha-nikāya*, II, p. 157) 実に諸行は無常なり、生と滅とをその本質とするものなり。生じては滅するものなり。これが寂静は安楽なり。（諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅為楽）とあるのに、意義上、照合する。[37]

なお方便品第六十八**行道偈前半**と寿量品第三**常住此説偈**もまた同義異偈と看做しうるから比較対照を要する。

これによって、筆者は、左の如く推考（denken）する。すなわち構造機能分析（Structual-Functional Analysis）をなそう。

(1)　**諸法**（＝苦）**は**（**因**なる）**縁**（によって）**生**（じ＝順観 anuloma-pratyavekṣaṇa＝流転門）（**因**なる）**縁**（によって）**滅**（するもの＝逆観 pratiloma-p.＝還滅門）である。原文の hetū teṣāṃ の因（hetu）は縁起を指称するとも解釈できる。

(2)　**諸法**（＝諸行）は**生・滅の法**（uppāda-vaya-dhammin＝生と滅とを本質とするもの）である。

(3)　この**生滅の**（法の）**道理**は**縁起**（pratītyasamutpāda）と称される。

(4)　それは偈所説の妙法（saddharma）であるから**法身**（dharma-kāya・舎利）とも称されよう。

(5)　これ（＝因なる縁による生と因なる縁による滅＝生滅の法の道理＝法身）すなわち**生滅の**（法の）**道理を仏陀の生涯**に対配すると、**如来の生**＝出現（＝成〻覚出〻世 abhisaṃbuddha＝出㆓現於世㆒ loka utpadyate）と**如来の滅**＝入滅＝（＝当〻入㆓涅槃㆒＝入㆓於涅槃㆒ parinirvāṇa）の由縁（△目的 prayojana）は何かという設問となりうる。

(6)　法華経は**如来の生**＝出現於世＝成覚出世**の目的は何かを方便品の主題**となして**十如**（△五何）**実相・四仏知見**を説いて、三

乗の説示（triyāna-nirdeśa）を善巧方便（upāya-kauśalya）なりと明し真実として一乗を示し、如来の滅＝当入涅槃＝入於涅槃の意義は何かを寿量品の主題となして久成を明して、もって伽耶近成の生滅の如来が方便垂迹であり、（文上随他意の）久遠実成（によって示される文底随自意）の常住不滅（sadā sthita aparinirvṛta）の如来が真実本地であることを解答とする。方便現二涅槃一（＝当入二涅槃一ātmanaḥ parinirvāṇaṃ vyāharati などと方便説法 vadāmy upāyam して涅槃地を示現する nirvāṇaṃ c'upadarśayāmi）とあるを思うべし。

(7) しかも方便・寿量の二品は共に善巧方便（upāya-kauśalya）をキー・ワードとし、令衆生入仏知見道を唯一の合目的々作用（eka-prayojana＝一大事因縁・一誼）とし随宜所説意趣（saṃdhā-bhāṣya）を根本概念（キー・コンセプト）（die Grund begriff）とする。しかも如来神力品は saṃdhā-bhāṣya を釈名（nirukti 語義解釈）して、その saṃdhā を anusaṃdhi（因縁・次第・所帰）にして sūtrāṇa... bhūta artha（諸経の真実義）なりとする。[38]

すなわち方便・寿量・神力の三品は必然的結合関係にある。すでに§7和辻説の結語④、§16鈴木説⑦⑧、§17横超説の結語⑨⑩に示した如くである。[39]

(8) かくして（一乗を示す）方便・（一仏を明す）寿量の二品が生滅（＝gambhīra-dharma なる縁起）の道理によせて説かれ、それを対応原理として一対不可分の相依関係（生滅即常住）にあることを知る。anutpattika-dharma-kṣānti の義を思うべし。

(9) よって、この法華経の方便・寿量の二品相依のパラダイムは、その発想の起因を「（仏陀は何故に世に出現し何故に入滅するのかに要約される）仏陀の生涯」の場面を表現する石板裏面に銘刻されるにいたった縁起法頌（＝法身舎利偈）にありと推定し、原拠を法頌における生滅の道理にありと推求することができよう。

(10) すなわち法華経は、仏伝における釈尊の生滅の意義を（無常）縁起（法性）の見地から常住（此説法）を示すものと開顕したのである。

塚本博士説㉕(1)の「久遠実成の本仏（＝真実＝無始無終の法身＝本地）と伽耶近成の釈尊（＝方便＝有始有終の応身＝垂迹）とは、異なった二つの存在と二つの時間に対する認識の結果ではなく、同一の存在と時間に対する異なった立場からの認識であり、究極において仏陀の認識（真諦）に統合されている」と見るのは、したがって適正かつ高度な洞察による所見である。

なお私見によれば、異なった立場とは、天・人・阿修羅を含む世間（sa-deva-mānuṣâsura loka）の所知（saṃjñeya）と、法華経会座の菩薩衆（bodhisattva-gaṇa）の所観（draṣṭavya）とであり、

かくして法華経の主題の一つは、**如来の常住不滅**（sadā sthita aparinirvṛta）・常住此説法・我浄土不毀を信解し信受することのできる、**浄業**（śubha karman）**によって柔和質直**（mṛdu mār=dva）**となれる心**（citta）を明示することにある、と知るのである。[40]

また法華教学の教相によると、**久成の本仏**は常住不滅と示されて**常住**なる**報身**であり、報身（智）の所証（すなわち実の如く知見する三界の相）が**常住**なる**法身**であり、久成の所知・所顕はいわゆる法身すなわち素法身でも単法身でもなく、「所作の仏事未だ曾て暫くも廃せず」と示される**常住**なる**応身**をも統一して（実在する）、**常住三身・無始の古仏**である**本極法身**（ほんくほっしん）（＝**本有無作三身の教主釈尊**）である、という。

以上は略説であり、これの広説は拙論「法華経成立の根本原理」をもってする。

十五、法華経成立論の帰結するところは定期間段階集成説となる

筆者は『法華経成立論史』において§1から§28までの諸学説を学習して分析し批評し、随処に私見や仮説を明示した。よって、茲では、これを起点として今後の法華経の研究の観点・方法・課題を要約的に指摘する。

勝呂博士の所論と学説は、従来の成立論の歴史的段階説に対する決定的な批判と疑点に対する総合的な解明と問題に関する総体的な帰結とを提示する。それは従来の根本的な学説を理解し、天台・日蓮の教学を熟知し、今経の内容を理解した上で、今経の文上の構成を形状分析して組織的構造を解明し、義理の構成を構造分析して論理的構造を把捉する。文章に対する心理学的と計量をもってする文献学的との分析をも試行し、形式論理学上の虚偽誤謬論にも抵触せず、しかも平易な論述である。かくして今経の全容（かたち・しくみ）と本質（はたらき）を明証しえている。

よって、勝呂博士の所論と学説は、筆者の解説的結語を追付してみれば、予定の拙著『法華経成立論史―法華経成立論の基礎的研究―』にとって、その結論ともなりうる。すなわち更に成立論に関する筆者の要結を示すと、左の如し。

およそ記述作品は章節序列をもつから長短の時差はあっても段階的に作成されたものである。よって法華経においても厳密には**段階成立説**は可能である。**章節のあることがそれを明証**するからである。しかし段階説は二方面となる。

勝呂説を適用して仮説を示すと、一方面は継続する一連の編纂作業という一定期間（＝一世代の短期間か）内において長行偈頌文章節目等が段階的に作成され一経として集成された場合で、これを**同時成立説**ないし**短期的**（＝定期間）**段階集成**（＝収集・制作・編成）説と称し、一方面は継続する一連の編纂作業による集成の終了

後に時を経て再作業による付加増補（＝加上）が段階的に何回かなされた場合で、これを**長期的**（＝歴史的）**段階加上説**と称することができよう。

そして筆者は勝呂説の**同時成立説**を肯定し、筆者の名づける**短期的**（＝定期間）**段階集成**（＝一定期間集成）**説**を仮説として主張したいと思う。

仏滅後の諸教団の史的発展に伴い大乗の徒や部派の間に塔観をめぐって対立論争が起り、それが解決されるべき問題として法華経中に流入して第二類増補の要因となったとする布施博士の説にしても、第二類は第一類との（前後次第の段階ありという）構想上の組合せにより同時に短期の間に制作集成されたとする仮説（＝短期的定期間段階集成説）をもって説明できるであろう。すなわち短期的定期間とは、今経の伝持者の伝承を集録し整斉しえた期間とも看做しえよう。したがって今経は、今経伝持の伝承史の諸段階ないし諸特徴をも包摂するであろう。これを**段階集成**という用語概念をもって要結したいとも思う。

しかし、**今経の真価値は**、如何なる伝承と段階を経て如何なる伝持者によって集成され、何時の時代に何処で成立しようとも、実には、その**思想と意趣にある**と思う。

大乗の人々は、「作者（＝編纂＝集成伝持者）が**仏法**を受持し演説して広く流布せしめた（sūtrântānāṃ dhāraka, sūtrasya dhāraka, nikṣepa-dhāraka, śāsana-dhāraka, dharma-bhāṇaka 法師な）のである」から、「今経は**仏説**である」と称して、何の矛盾も感じなかったのであろう。それは大乗の人々が今経に「**仏意**（sūtrāṇa bhūtârtha＝saṃdhā-bhāṣya＝abhiprāya）**が伝承されている**」と確信したからであろう。今経が**三蔵の要点**を把握し仏・法・僧に関する教・行・証を明示して、人々に感激を与えたからでもあろう。

したがって、残る研究課題は思想研究にある。思想研究は思想史的研究をも要するが、先ず今経それ自体の思想研究であろう。筆者はその観点から、勝呂博士の「諸品の所説を積み重ね人格像の進展をもって理想の菩薩像を樹立する」とする知見に着目するべきである、と思う。しかも、今経は妙法（＝仏宝・法宝）を明示し菩薩（＝僧宝）道を説示する経典であるから、その**妙法**（saddharma）と**菩薩道**（bodhisattva-caryā）**に関する基礎的な研究**が必須となる。

また筆者は勝呂博士の指摘するところにより、今経の特徴として、「観点の推移」・「位置の転換」・「行目の変更」・「主役の交代」、「視点の差位」・「焦点の移行」・「理趣の進展」、「構想の多角性・多義性」・「文脈の次第性・重層性」を指摘できる、と思う。

しかも、今経における根本的にして不可分なる対応性が、第一類の**方便品における Saddharma—Saṃdhā-bhāṣya＝eka buddha-yāna**—と、第二類の**寿量品における Saddharma—Saṃdhā-bhāṣya**

= tathāgat'āyuṣ-pramāṇa = sadā sthita aparinirvṛta―との相依関係にあり、それを底礎し統合するものとして、神力品における Saṃdhā-bhāṣya の語義解釈（＝nirukti 釈名）と Saddharma たる四句要法として看取される。特に着目するべきことである。

なお拙著の§27の解説的結語⑥⑦の(1)乃至(10)、(18)を往見されたい。

また Saddharma = Saṃdhā-bhāṣya の文脈が方便・譬喩・薬草・法師・勧持・安楽・寿量・分別・神力の諸品において、菩薩行（bodhisattva-caryā）の文脈が久成釈尊との関係を観点とすると、化城・提婆・涌出・不軽・神力の諸品において、上慢（abhimāni=ka）の四衆との関係を観点とすると、序品・方便・譬喩・法師・勧持・安楽・分別・不軽の諸品において、法師の体系との関係を観点とすると、法師品・法師功徳品において、Adhiṣṭhāna の体用の文脈が譬喩・法師・宝塔・安楽・寿量・不軽・薬王・妙音・普賢・勧発の諸品において、それぞれ連系（する）関係にあることが看取される。これだけでも文脈の次第性と重層性が確認され、構想の多角性と多義性が認知されて明証されるのである。

かくして残る課題は、今経の各々の特定の単位文脈を分離して各々の特徴を捕捉し、各々の特徴の一定の相互連関性（＝システム）と、そのシステムのもつ目標指向性とを、すなわち（菩薩思想の）全的な（論理的）構造（＝全容）と共通の（理念的）意趣（＝本質）とを把握することにある、と思う。

しかし果して論理的構造ないし理念的意趣はありうるのだろうか、あるとすれば如何なるものとしてであろうか。

それは拙著の『法華菩薩道の基礎的研究』（平成16、平楽寺書店）における研究課題の基調となる。すなわち今経の全的な義理の構成を求めて構造分析をなし、もって論理的構造を明証し、共通の意趣の構成を求めて機能分析をなし、もって理念的意趣を追究するのである。

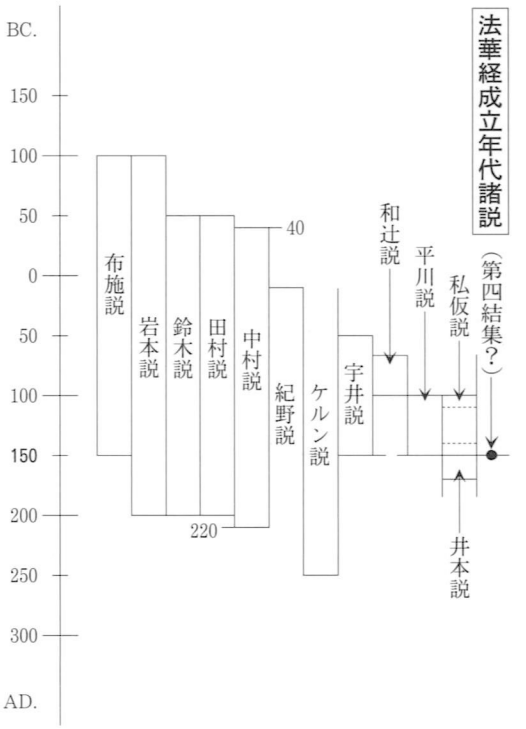
なお筆者は、法華経は経であるから、他集団に反対はあったにせよ、自集団の結集（saṃgīti）による編纂（＝収集・制作・編成＝集成）の上で仏説として承認され公表されたものであり、菩薩衆（bodhisattva-gaṇa）の共同作業の所産である、とする仮説を提示し首肯する。この仮説は、成立の実状を示唆する法華経の文面によって傍証される。その基本的な多少を拙論「法華経成立要論」の三において明証したところである。

十六、法華経の成立年代に関する私の仮説は

なお法華経の成立年代について私の仮説を提示しよう。かつて龍山章真博士は、支婁迦讖訳『兜沙経』（華厳大本の如来名号品）は十地経を知っているとして、十地経の原形経典の成立を西紀五〇より一五〇年の頃までと推定し、筆者はそれにより一〇〇年の頃と推

定した（目下、反省中）。また村上征勝理学博士と筆者等が開発提唱する**計量文献学の分析手法**によると、法華経は八千頌般若経と十地経との間に位置する。さらに仏滅後五百年を説く**大乗経典の急激な出現と流布に対する守旧派による反動規制として第四結集**（西紀一五〇年）**が行われたのではないかとも推考される**。とすると、仏滅後四百年の第四結集（一五〇年）以前（直前か数十年前か）と見る、**もう一つの仮説**も可能となる。それは一〇〇―一五〇年と見る平川博士説に相当する。その五十年間中の中間の三十年以内と、一往、推定しておきたい。

法華経成立年代諸説



詳しくは拙著『法華経成立論史』の当該箇所を参照されたい。

十七、本論において提言した新研究の観点・方法・課題・目的の帰結するところは如何

本論において提言した新研究のSyntheseなる志向性の帰結する最終的な根本要点を図式化して明示すると、左の如くになる。

これによって、本論の五における図式中のXが解明されたであろう。主（おも）に左記の拙論によって広説するところである。

拙論「**法華経集成の根本原理**（は**仏教思想の根本真理**なり）」（平成20年、『法華文化研究』第34号所収）

一、問題の所在
二、方便品・寿量品の一対相依関係
三、奉献塔の**縁起法頌**（＝法舎利＝法身偈）
四、**縁起の法と如来の生滅**
五、**方便寿量二品の一対相依関係と如来神力品の語義解釈**
六、縁起法頌と順逆二観と大悲随順観・常住不滅
七、**方便品の長行と寿量品の常住此説偈**
八、**方便品の行道偈と寿量品の長行**
九、『生死一大事血脈抄』等に見る生滅即常住（＝不生不滅）の論理
十、縁起法頌類通

なお、以上、詳しくは拙論「法華経研究の新方法序説」・〔第十二図〕法華経原典構造機能分析総合解明を往見されたい。